

奈良

いのちの電話

2017 新年 第367号

特集

「さとりを求めて幾千里」― 善財童子求道の旅 ―

森本 公誠 師

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局／〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



書・森本
公誠

新しき
願もありて
今朝の春

夏目漱石



風 鐸

平成29年、輝かしい
新年を迎えられたことに
感謝いたします。

年末年始は年賀状や寒
中見舞など、文章を書く機会の多い
季節です。昔はゆっくり墨を擦り毛
筆で、今ならパソコンで印刷、と形
式は変わってきましたが、手紙は良
いものです。受け取る人は相手の丁

寧な気持ちに接することができ、書
く人には達成感が得られます。

かく申す私が、昨年どれだけの手
紙を書いたか？記録も記憶もありま
せんが、せいぜい10通程度でしょう。
良き関係を築けたかもしれないのに
…もったいないことです。

先日「二人の小学生には電子ゲー
ムを持たせない」というご両親にお
会いしました。親子で過ごす時間を
大事にしているそうです。丁寧に、
時間をかけて、人と人が向かい合う、

ということなのでしょう。私はこれ
も一つの見識かと思います。

パソコン・スマホを使ってメール
を送ったり、SNSに参加して多くの
人と知り合うことは現代人は得意な
のですが、手間ひまかけたつき
合いは苦手になっています。「人に
語る」「人の話を聴く」という基本
から遠ざかり、多くの人とつながろ
うという応用に向かっているのかも
しれません。

(樹)

公開講演会

「さとりを求めて幾千里」

— ぜんざいどうじ ぐ どう たび
善財童子求道の旅 —

講師 森本 公誠 師（華嚴宗 東大寺長老）



森本 公誠 師 プロフィール

1934年生まれ。1949年東大寺に入寺。1964年京都大学大学院博士課程修了。文学博士。1965～98年京都大学文学部講師。2004年東大寺第218世別当・華嚴宗管長就任。2007年より東大寺長老。2010～13年東大寺総合文化センター総長。主な著書に『善財童子 求道の旅—華嚴経入法界品・華嚴五十五所絵巻より—』（朝日新聞出版・東大寺1998）『聖武天皇 責めはわれ一人にあり』（講談社2010）『イブン＝ハルドゥーン』（講談社2010）など。

2016年9月16日、厚生労働省自殺防止対策補助事業として、奈良のちの電話公開講演会が東大寺金鐘ホールにて開催された。「人との出会い方を考えてみませんか」という呼びかけで集まった260余名の聴衆を前に、東大寺長老の森本公誠師に講演をしていただいた

シャカムニ＝ブッダのさとりと大乘仏教の成立

主催者から「善財童子求道の旅」の話をと要望されました。これは『華嚴経』というお経の最終章「入法界品」に出てくる善財童子の旅物語です。善財は心の清らかな若者で、自分が〈さとり〉を得て、悩み苦しむ人々を助けようと志をもって旅をするのです。ところが『華嚴経』は大変難しいもので読んですぐわかるというわけにはいかない。そこで、予備知識が望まれます。

仏教は今から二千五百年前、インドの小さな国の王子だったゴータマ・シッダールタによって始められた。彼は将来を約束された王子であるにもかかわらず、幼い頃から物思いに

ふけるようになり、人間はなぜ生まれ、やがて老い、病を得て死んでしまうのか、人の一生とは結局は悩み苦しむことではないのか、と心が晴れることがなかった。恐らく自分が生まれたときに母親の王妃が亡くなってしまったことに原因があると思われます。とうとう29歳の時に人間とは何かの答えを求めて修行の旅に出た。

断食など厳しい苦行に励むこと6年、やがて坐禅をして深い瞑想に入った。すると、幾日経ったある夜明け前、心のなかに神秘的ともいえる大きな変化を体験した。仏教ではこのとき、シッダールタは〈さとり〉を開かれ、ブッダ、つまり「目覚めた人」となったとする。またシッダールタは釈迦族出身の聖者なのでシャカムニ、そこでもっぱらお釈迦さんと呼ぶ。ご自身はこの「さとり」についてこう語っておられる。

「自ら知ったのであるから誰をたのもうか。われに師はない。我に似た者はいない。神々を含めた世界のうちに、われに比肩しうる者は存在しない。」とか、「私は天でもない、夜叉でもない、人間でもない、煩惱を断ち切ったのだからブッダなのだ。」とかです。ここには誰の助けも借りずに〈さとった〉というお釈迦さんの確信がある。お釈迦さんはその確信にもとづいて人々に生きるべき道を説かれた。

ところが、お釈迦さんが亡くなられて数百年も経つと、大乘仏教が生まれ、仏教は大変な変革を遂げた。たとえば、その仏典の一つである『華嚴経』では、お釈迦さんの〈さとり〉は全く違った形で語られている。その内容はわかりやすく言えば、悟りの瞬間、お釈迦さんは神々しい光を発し、その周辺は様々な花が咲き乱れる園となり、葉先の玉の露は金剛と化し、さらにその光は無限の広がりをもって宇宙に輝きわたった。この時点で、お釈迦さまは毘盧遮那仏^{びるしゃなぶつ}となられた。つまり「光のほとけ」となられたということです。しかもその光は永遠に輝き続け、今現在も我々を照らして、人々を救ってくださっている。たとえ地獄に落ちたような人のところにもその光は届いているということです。

「善財童子求道の旅」のはじまり

「入法界品」の冒頭には、シャカムニ世尊がコーサラ国のジェータ林中の大莊嚴重閣^{だいそうごんじゅうかく}におられ、五千人の菩薩たち、

五百人の声聞^{しょうもん}たち、諸王^{しよおう}たちを前に、深い禪定に入られる場面が描かれている。世尊が光を発すると大莊嚴重閣はすると広がりはじめ、際限もない大きなものとなり、ジェータ林も大きく広がり、宇宙の果てに至るまで光が届く。すると、宇宙の果ての十方の世界から菩薩たちが地上にやって来て、世尊の説法に聞き入る。

このような壮大な説法座に参加していた文殊菩薩^{しゆじよう}が、衆生済度のために諸国遍歴の旅に出られ、ダニヤカーラという大都城に着き、説法しようとした。その時、文殊菩薩は善財童子に気がつく。

童子はここで文殊師利に嘆願した。「生老病死の四苦に悩み、輪廻転生にあえいでいる人々をどうすれば苦難から救いだせるか、どうか私に解脱の門を開き、さとりの乗り物をお与えください。人に施しをし、やさしい言葉をかけ、人のためになることを行い、相手の立場に立って考える、そのような四摂^{ししようれ}事の教えは、衆生たちの心の糧。そのことはよくわきまえております。あなたは智の眼によって、法という無上の冠をいただきました。そのような法の王城をどうか私にもお示してください」と。すると、文殊菩薩は答えられた。

「けなげな善男子よ、汝はすでに無上のさとりに向けて発心し、菩薩道の成就には、菩薩行をよく問わねばならぬと自覚している。親しく善知識たちに仕え、衆生のために普賢の行を修めよ」と。

そして文殊菩薩は、先ず南の徳雲比丘を訪ねよう薦める。そこで善財童子は徳雲比丘を訪ねて教を請う。徳雲比丘は、念仏、憶念で仏さまが現れることを経験したと教える。次に海雲比丘を教えられて訪ねて行く。海雲比丘は十二年間大海を見つめ続けてきた。海中から大きな蓮華が現れて仏様が坐られ、普眼の法門を解き明かしてくださったと伝えた。こうして童子は善住比丘^{ぜんじゆびく}、弥勒長者^{みく}、解脱長者^{げだつちやうじや}、海幢比丘^{かいどうびく}、休捨優婆夷^{しゆしやうはい}、毘目瞿沙仙人^{びもくくしやせん}、勝熱婆羅門^{しやうねつばらもん}など次々と善知識を訪ねて行く。勝熱婆羅門のところでは「剣の山に登って、この火の海に身を投げよ」といわれ、これは悪魔ではないかと疑うが、疑うことはないという梵天たちの声が聞こえ、思い切って身を投げる。すると、地に着くまでにいろんなことをさとしてすんなりと大地に降りることができた。

このように苦労して旅をしながら五十三人の善知識と出会うことで善財童子は人間として成長し、やがて目的の「さとりと何か」ということを再認識して、最後に普賢菩薩に会い、お釈迦様にも会う。

それぞれの善知識に出会うと、皆教えが違う。違うということは、人間にはいろんな人がいて、一つの解答、一つの鍵で全部の人の心を開けることはできないということではないかと思う。電話を受けるということも、それぞれ話を聴いてその鍵を自分で見つけて答えを出しておられ、日々苦労されているのだらうと思っています。

善財童子の旅は、五十五場面まで出てくるわけですが、延々と話ができませんので、後は私の本を読んでいただければ幸いかと思います。

情報化社会のなかで考える

生い ⑦

—— 忘れえぬ出会い ——

天理大学人間学部宗教学科講師 渡辺 優

昨年10月、初の単著を上梓した。博士課程より取り組み始めたテーマ、17世紀フランス神秘主義をめぐる、およそ10年の研究の成果である。

ところで、書物には「あとがき」というものがある。著者にとっての第一作である場合はとくにそうなるだろうが、それは、恩師をはじめ多くの方々への謝辞が述べられるべき場所である。自分で書いてみてつくづく感じたが、「あとがき」をまとめるのは簡単ではない。紙幅は限られているのに、お礼を言うべき人、言いたい人はとめどなく心に浮かんでくるのである。記される名前の数は、ごくわずかにとどまらざるをえない。だが、著者の脳裡には、それがなければ当の書物もありえなかった、有名無名の人びととの出会いの記憶が去来しているのである。

私の研究にとって、3年弱のフランス留学は決定的であった。だがそれも、或る出会いがなければ、まったく別の結果になっていたかもしれない。初めてフランスの土を踏んだのは2008年の夏のことであった。博士課程2年目、本気で留学を考えるようになっていたが、実現するためには当地の先生を見つけなければならない。当時は何の当てもなかった。ともかくも行ってみようと、7月末から9月末にかけて、パリの語学学校でのフランス語集中講座に登録した。時間はあっという間に過ぎていったが、手からは見つからないままだった。

それは集中講座が終わる頃の出来事だった。クラスメートたちの前で、自由にプレゼンするという課題が課され、私はカトリック神秘主義の歴史について話をした。拙い発表だったが、ヴェトナム出身のカルメル会修道女（カトリック系のその学校には多くの信徒が学んでいた）がいたく感激し、彼女の修道院での昼食に招待してくれた。修道女たちとテーブルを囲みながら、私は研究と留学への気持ちを語った。すると院長が私に言った。あなたが探している先生を紹介してあげよう、と。

こうして私は、以後の留学を通じてお世話になる、イエズス会神学部のグジョン先生に出会うことができた。先生の名前は「あとがき」にも記してある。しかし、私の研究に思いがけず新たな扉を開いてくれた修道女の名前はそこにはない。彼女の名前はMinhcuu（ミンクー）という。もう連絡も途絶えてしまったが、彼女の名前を忘れることはないだろう。